

# 厳粛で、愉しげな、ハンティのクマ遊び

おおいし ゆか  
大石 侑香

民博 学術資源研究開発センター



### ヒグマの肉を罵倒してみました

スノーモービルでトナカイ群を採る筆者  
(撮影：エヴゲーニー・エブリン)

特定の動物を神聖なものと崇める文化は世界各地で見られ、その信仰や人とのかわり方もまたさまざま。今回は、西シベリアに暮らすハンティがおこなう「クマ遊び」というユニークな儀礼について紹介する。

## クマ遊びの調査

二〇一六年三月にロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区のスイニヤ川上流でおこなわれたハンティのクマ遊びに初めて参加する機会を得た。ハンティは西シベリアの森林地帯に居住している。現在は都市部で暮らす者も多いが、都市から遠く離れた森のなかで漁撈や狩猟採集、トナカイの牧畜を営んで暮らす者もいる。わたしは、こうした生業活動を中心とした寒冷地における環境利用技術に関心をもち、調査してきた。彼らの信仰や儀礼について調査することはあまりなかったため、このクマ遊び調査では、見る・することすべてが新鮮だった。



天幕の準備 (写真はすべてロシア、ヤマル・ネネツ自治管区にて 2016 年に撮影)

と共食、一部の踊りをするのは許されている。ここでは、真剣かつ面白おかしなヒグマの肉の共食について紹介したい。

### ヒグマの肉を食べる作法

儀礼の中盤では、茹でたヒグマの肉を共食する。神聖なヒグマの肉を食べるには、いくつかの作法に従わねばならない。それらは通常人間がすることとは反対のふるまいをして、人間がしているのではないということを示している。まず、ヒグマの肉に俗語や卑語を浴びせかけて罵る。女性は天幕のなかで、男性は外でそれぞれ食べるため、



飾り付けられたヒグマの頭部と毛皮

ロシア連邦  
ヤマル・ネネツ自治管区



遠慮なく叫ぶことができる。わたしが、普段口にしたら怒られるような下品な俗語を使っているのかと戸惑っていると、そばにいた方が「大きな声で言わないといけない。日本語でもいいから。彼(ヒグマのこと)は何語でも理解できる」と促し、男根を意味するハンティ語の卑語を教えてください。わたしが教えてもらった卑語をまねて言うと、発音がおかしかったらしく、皆が笑い転げた。お返しにわたしが日本の卑語とその意味を教えると、年配の女性たちが面白がってこぞってまねて叫んだ。あまりに大きな声で叫んだため、天幕の外にいる男性たちにも聞こえたようで、天幕をたたいて茶化してきたことで、さらに盛り上がりすぎて大笑いした。こうしたひととおりの罵倒と大騒ぎを終えてから、やっと肉を食べることが出来る。ヒグマの肉を直接手で持つてはならず、木の枝を削って先を尖らせた棒で肉塊を串刺しにして口へ運ぶ。串刺しにするときには

「カルカルカルカルカル……」と言わねばならない。木の棒は鳥のくちばしを、「カルカル」というのは鳥の鳴き声を模している。なぜこうするかというと、人間がヒグマの肉を食べているのではなく、鳥が食べているようにヒグマに思わせるためだろう。

さらに、他の肉や魚と異なり、ヒグマの肉には塩等の味付けは一切してはならない。そのため、味が引き立たず、正直なところとても物足りなかった。それを隣にいた方と共感したいと思いき、軽い気持ちで話しかけようとしたが、食卓を囲む人びとがあまりに真剣な面持ちで食べていたため、できなかった。天幕内はさきほどの大笑いとは打って変わって重々しい雰囲気になっていた。

送り儀礼であるクマ遊びの過程には、厳粛で真剣な場面もある。しかし、その一方で、普段なかなか会えない遠くの親戚が集まり、一緒においしいものを食べ、歌い、踊り、冗談を言い合い、コントのような即興寸劇を見て笑い、雪をかけ合ったり相撲をとったりして遊ぶ。クマ送り儀礼は、意外と愉快で、明るく楽しいものであった。



上：茹でたヒグマの肉を食べる人びと  
下：歌や踊りで盛り上がる天幕の内部